

医薬品情報の評価と活用

——医薬品は十分な情報が伴って始めて医薬品と言えるが、医薬品情報は適切な評価能力を備えた薬剤師によって始めて生かされる。

内山 充

薬剤師が、自らの専門性を生かして医療の質向上などに貢献するためには、医薬品情報は欠くことのできない重要な要素である。しかし、情報は新鮮であり役には立つが、それ自身は断片的であり進歩はない。人間と環境は常に変化しているが、情報自身は明日になってもそのまま変化しない。

また、情報は言葉に順序をつけて文章化したものである。順序の付け方によって意味するところに大きな差異が生じる。それは発信者の意図に左右される。たとえば「情報は新鮮であり役に立つが、それ自身は断片的で進歩が無い」と「情報は断片的でありそれ自身進歩はないが、新鮮であり役に立つ」とでは、受ける印象に大きな差がある。

薬剤師は、情報の獲得には意欲的でなければならない。そして、今や多様なチャンネルを通じて豊富な医薬品情報を比較的容易に入手することが出来る。しかし、関連のある情報を沢山集めて、そのまま伝えるだけでは単なる情報屋に過ぎない。薬剤師には、得た情報を正しく評価して選別し、さらに、つながりを付け、業務の目的に適合した知識にまで組み立てる「評価能力」が必要である。その結果、倫理的にも、専門職能から見ても、優れた動作を自ら自然に行なえるようになることが大切である。

評価は単なる思考ではない。根拠に基づいて結論を求める「科学」である。評価は、言うまでもなく情報ばかりとは限らず、教育、研究、調剤、開発、審査、認定、その他あらゆる場面を対象として行われるが、その基本となる能力は、

①ことの本質を常に見失わないこと - - 目的意識をはっきりと持つこと

②適切な価値基準を持っていること - - 目的に照らして、何が重要で価値があるかを弁えること

③正しい予測が出来ること - - 判断と行為の波及効果を見通す先見性を備えることにある。これらを基に、適切な評価の心構えが導かれる。

評価の能力を養うには、意欲的な生涯学習が必須である。学習と情報獲得とは、薬剤師にとってほぼ一体の関係にある。学習の目的は、単に知識を増やすことでも免許や資格を取ることもない。医療の質向上を通じて薬剤師として人々の役に立つことにある。生涯を通じた学習と、本質をわきまえた自己努力により、しっかりした基礎知識と広い視野と正しい論理的根拠、および多様な価値観を養い、正しい評価能力を身につけるように努めたいものである。

(2007.7.22)